

「生きる力を育む道德教育 ～総合学習・心のノートと関連づけて～」

山口大学教育学部附属山口小学校 教諭 坂本 哲彦

(1) 総合単元的な道德学習の効果的な仕組み方

総合単元的な道德学習は、いわゆる「関連的な指導」である。関連的な指導とは、学習内容や方法が似ている複数の教科や領域を組み合わせで行う。それぞれの目標がより確かに達成される場合にのみである。どれかがどれかの手段や方法になってはならない。対等の関係である。

ア 内容の関連

指導計画に記述されている教科や領域、そして道德の時間の内容に関連があるか、まずもって吟味が必要である。「総合学習で老人ホームを訪問するから道德の時間は、思いやり・親切の学習にしよう」程度の捉えでは不十分である。少なくともその学校で定めている総合学習の内容・評価規準レベルで道德の内容項目との関連を捉えなければならない。また、「思いやり・親切」という価値内容を関連指導する総合学習で観られる行為のレベルで捉えておくことも必要である。「総合学習で予想されるこの場面のこんな子供の姿を捉えて、道德の時間のこの話し合いに生かそう」という目論見が教師に持てなければならない。

イ 方法の関連

単元「的」である以上、通常の指導では意識は連続しない。それ相応の教師の働きかけや仕掛けが必要である。意識の連続を図るには原則がある。方法の関連の保障である。

(ア) 単元構成上の三つの原則

一つは、この教科もあの領域も関連づけて指導しようと思わないことである。それぞれの目標と内容の吟味が必要であるし、子供は発達特性上いくつもの内容を関連づけて思考することが不得意だからである。「あれもこれも」ではなく、「これとこれ」で単元を仕組む。私は、「総合学習と道德の時間」、「国語科(その国語は「」を取材して、ブックを作ろう」などのような活動単元であることが多い)と道德の時間」など一つの教科や領域と道德の時間の関連指導に限定することがほとんどである。

二つ目は、短い期間で単元を終了させることである。一学期間ずっととか、時には一年間連続で一つの総合単元テーマを追求することがある。それはそれで悪いことはないけれど、子供の意識の連続は期待できない。意識が連続しないと学習内容の関連も希薄になる。通常1, 2ヶ月が妥当である。できれば1ヶ月以内がよい。そのほかの教科や領域で1ヶ月を越えるような単元がないことから、この期間が妥当である。

三つ目は、主たる学習活動を一つにすることである。道德の時間ではないもう一方の教科領域での主活動に道德的な意識や実践を入れ込むことである。いくつかの活動があるということは、いくつかの主たる意識があることを指す。違った活動を支える別々の意識を

を道徳的な意識で束ねるのは難しい。

(1) 道徳の時間構成上の三つの原則

導入は、もう一方の教科領域での子供の具体的な活動の姿や感想などから、「価値への導入」を図ることである。写真でも日記でもよい。顕わにもう一方の教科領域の学習と関連していることを示すべきである。そうすれば、「老人ホームのお年寄りの方へかかわるときに大切にしたい思いや願いについて、考えを深めましょう」のように、関連した課題を作ることが可能となる。

展開においては、子供の発言の根拠や発言を支える心情をもう一方の教科や領域の活動と関連づけるような、教師からの「言葉がけ」「問い返し」を行うことである。「そう言うのは、あなたが老人ホームでそんなことを思ったからなの？」などである。子供同士の対話で関連づけが図られるような間接的な支援ができれば、より望ましい。

終末では、教科領域での活動を再提示する。そして、その活動を想定して「その子なりの思いや願いを深めるような活動」を促す。それは、「いつ・何を・どのように」のような具体的なめあてになることもあろう。それはそれでよい。が、それにとどまらせないで、その理由やそれが大切だという意味、価値に思いが至るような支援が必要である。そして、その思いや願いを次の活動で見とれるように教師はかかわるし、子供も自己評価する。

(2) 心のノートの効果的な扱い方

ア 基本は、個人の自由な記述

道徳の時間やその他の教育活動で計画的に活用するという役割と、一人一人の成長のアルバムにするという二つの役割を担わされている。どちらも真である。しかし、やはり基本は個人の自由な活用である。なぜなら、一人一人の子供が心のノートを「進んで楽しく」活用しようとする態度が身に付いたならば、それは、道徳の時間に生きて働く心情、思考・判断、態度だけではなく、道徳教育全体の目標である道徳性を身につけようとしていることになるからである。今まで、全教育活動を通じて、あるいは子供の生活全体に働きかけるような学習材はなかった。だから、教師は扱い方にとまどっているだけである。したがって、教師は、授業で効果的に活用するための配慮より、楽しく進んで自由に子供自身が活用することに腐心すべきである。2, 3年は、ノウハウを見つけ出す努力をするときである。

イ 心の日記

「子供の生活全体に働きかける学習材」として、私は、日記的な扱いを子供に勧めている。日記を書く感覚で、心のノートのページをめくる。そして、今の自分の気持ちとひびき合うページに出会う。そこに今の思いを記述する(出会わなければ、その日は書かなければいい)。時には、日記を読み返すように、今まで書いてきたページを読み直す。そのときの気持ちを思い出し、うなずく。あるいは、今は違う気持ちをもっていることに気付くこともある。そして、何かやってみようとして心を温めるものが現れる。教師は、そんな一人一人の思いに寄り添って、通常の日記に書くように朱書きをしたり、言葉がけをしたり、みんなの前で価値付け広げたりする。日記指導の一つとして、まずは取り組んでみてはどうだろう。